

未来に伝えよう！

定山溪鉄道

かつて南区に、鉄道が走っていたことを知っていますか。定山溪鉄道(定鉄)は、大正・昭和期に札幌市中心部と定山溪を結んでいた鉄道で、札幌市の産業の発展を支えていました。約半世紀にわたって活躍した定鉄ですが、今ではわずかな痕跡を残すのみとなっています。

【お問い合わせ先】
総務企画課広聴係

☎(582) 4714



昭和37年(1962年)1月頃

【主な参考資料】

株式会社じょうてつ ホームページ「じょうてつのあゆみ」
さっぽろ文庫11 札幌の駅
南区のあゆみ



※他に引込線(3線)あり。



▲真駒内地区を走る定鉄(昭和43年(1968年)頃)

※開業後、駅は順次増設された。

本路線図は昭和36年(1961年)頃～廃線間際のもの。なお、苗穂駅～東札幌駅間は昭和6年(1931年)から旧国鉄線に直接乗り入れを開始。また、白石駅～東札幌駅間は昭和20年(1945年)に廃線となっている。

「硬石」と「軟石」

定鉄の歴史は、札幌の発展の歴史に大きく関わっています。

明治に入ると、政府は北海道の開拓を早急に行うことを決めました。

開拓使は本道の住宅を寒冷地に適したものにするため、建築物は洋風で建設する方針を採りました。そこで必要とされたのが、南区で切り出される「硬石」と「軟石」です。これらの石材を運搬するため、明治42年(1909年)に札幌石材馬車鉄道株式会社が設立され、二本のレールの上を馬に引かせて走る「馬車鉄道(馬鉄)」が札幌市街と石山をつなぎました。

新たな輸送手段を求めて

札幌のまちづくりが本格化していくのに伴い、石材の運搬に加えて、定山溪周辺の森林から切り出された木材や、当時開発計画が持ち上がった豊羽鉱山から採掘される予定の鉱石、さらには豊平川水系に開発が計画されていた水力発電所の建設用資材などの運搬にも対応するため、新たな輸送手段が必要とされるようになりました。

また、当時の定山溪温泉の

利用客は、馬鉄に乗って終点の石山で下車した後、そこから馬車に乗るか、一日がかりで歩くしかありませんでした。そこで、鉄道を開通させるために札幌在住の財界人24人が発起人となり、大正2年(1913年)2月に鉄道敷設免許を申請、同年7月に免許状が交付されました。

しかし、資金集めの難航や、路線計画の変更などにより、鉄道の工事は思うように進みませんでした。待望の一番列車が走り出したのは、免許状交付から5年後の大正7年(1918年)のこと。同年10月17日、秋晴れの空の下、白石から定山溪までの鉄道営業が開始しました。

南区に鉄道が走る

開業当初、列車は一日3往復。白石を始発として、途中、豊平、石切山、藤の沢、簾舞を経由し、終点の定山溪までの道のりを約1時間30分で結びました。開業当初の定鉄の機関車は煙筒が長いわりに車体が小さく力もあまりなかったため、「豆機関車」と呼ばれていました。傾斜の急な坂にかかると一気に登りきることができず、一度後退して勢いをつけてから登り直したといわれています。

